

## 【ちょっと変わった留学記】～その1: 特訓編

## ベラルーシでロシア語特訓

鎌田 幸伸(ロシア語通訳案内士/奈良県在住)

ロシア語通訳案内士の鎌田幸伸さんから、面白い「留学記」を送っていただきました。鎌田さんは、通訳案内士試験を突破するために、なんとそのためだけに 2016 年 8 月から 11 月までベラルーシのミンスク言語大学に留学し、「試験対策の特訓」を行いました。留学記は、ミンスクの街の様子やそこでの出来事、学生寮や図書館、青空市場、郊外への見学ツアーなど多岐にわたりますが、今回は鎌田さんの特訓ぶりに絞って留学記を抜粋・要約し、紹介させていただきます。(編集部)

## なぜ自分はミンスクに来たか

一昨年(2015年)の12月にロシア語通訳案内士(ガイド)の口答試験を東京で受けた。試験は2問……①試験官が読み上げる日本語の文章を1分以内にロシア語に訳す口頭作文、②指定された3つのテーマから一つを選んでロシア語で行う日本文化のプレゼンテーション。

惨憺たる出来だった。口頭作文は日本語の内容をメモしたがロシア語に訳せない。無情に時間が過ぎる中で言葉の出でこない自分を2人の試験官は悲しげな目で見ていた。プレゼンのテーマは、「冬至」「けん玉」「街コン」から選ばなくてならなかった(よくもこんなおかしなテーマばかり選んだものだ)。「街コン」を選んで、普通の「合コン」と思って話したら、後でまったく的外れとわかりガックリした。

2月に不合格とわかった。「いくら勉強しても的を絞れない、ある意味で不毛な語学力を問う試験」を放棄してもよかった。幸か不幸か、筆記試験の4科目はすべて同時に合格していた。それで今年(16年)は筆記試験免除で口答試験のみに集中できた。「今、ここでやめたら後悔する」と思って、それからは12月の試験を目標に新たに取り組み始めた。

「テーマを選び、その資料を読み、3～4文のロシア語で説明文を書き、同時に日本語の情報も書き込むノートの作成」に一から取り掛かった。それまでは主に通訳案内士試験対策を扱っている通訳学校の対策問題・模範解答をロシア語に訳して覚えていた。が、それではうまく行かなかった。個々のテーマについて自分で調べ、自分の言葉で説明できなければプレゼンしたり、想定外の内容の文章を通訳したりできない。結局、無駄足のような地味な努力しか通用しないと反省した。

大学受験ではあるまいし、ロシア語通訳案内士の予備校



ミンスク言語大学の学生寮(提供:藤田勝利さん)

なんてない。一昨年に知り合ったロシア人の留学生に頼んで作文を直してもらい、週に1度1時間スカイプで会話の個人授業を受けた。ウィークデイの夜に授業を受けると、次の日はストレスであまり集中できず頭がぼんやりしている。バイトもせずに勉強だけに専念しているわりにはそれほど集中できない。コツコツと作文しノートを作っていたが、「自分のロシア語は果たしてロシア語圏の国でどれだけ通用するか」不安になってきた。大体、週に1回1時間ロシア語を話すぐらいで会話力が鍛えられるだろうか?ロシア語の会話力を鍛える、ただそれだけの理由で短期留学を決めた。

ロシア語圏の国は入国するのにビザがいる。ビザを取得するのにロシアは最低3ヶ月かかる(\*注)。ベラルーシは2ヶ月、EUに入っているラトビアはビザなしで行ける。私は Санктペテルブルグには3年間住んでいた。知り合いもいる。けれどもその都市にもう一度学びに行こうとは思わなかった。学費が一番安いのはベラルーシ。学費は高いが早くいけるのはラトビア。で、前者にした。……。

7月31日に出発して、8月から1～2ヶ月ぐらいいよう。調子がよさそうなら11月半ばまでベラルーシにいようと思った。ベラルーシという国はほとんど何も知らない。……。今まで行ったことのない、日本から1万キロ以上離れた、誰も知り合いのいない、日本語の通じない国に行く、しかも目的は12月のたった10分足らずの試験のため……大胆といえば、これぐらい大胆な留学もないかもしれない。ベラルーシの首都・ミンスクに到着後、寮から日本の知り合いに電話したら「ようやるわ」と言われた。

\*正確には、ロシアの留学ビザ取得は約2カ月、ベラルーシのビザ取得は1カ月半でできる(2018年4月現在/編集部)

## ナターシャ先生

8月いっぱい「先生方の多くは休暇中ではありません」とのこと、グループの授業に私は参加することになった。

この大学の外国人向け講座は10くらいのグループに分けられている。一人の先生がグループを2～3ヶ月担当して、1日に2コマ(一コマ80分)を受け持つ。だから定期的に先

生が入れ替わっていくのだが、この大学にほぼ10ヶ月いた日本人学生によると、ナターシャ先生は外国人学生の間では1、2を争う人気講師らしい。

私は大学の初日にロシア語レベルをはかる試験を受けるものとばかり思っていた。入学案内には「最初の日に選抜テストがある」と書いてあった。だが私がロシアでの留学証明書のコピーを事務で渡すと、「あなたはハイレベルのクラスに入ってください。テストの必要はありません」と言われた。それだけ長期間勉強した学生はいなかったようだ。

「この先生があなたのグループの先生ですよ」と紹介されたのがナターシャ先生である。若々しくて瑞々しい、可愛らしい先生である。「にこにこ」と微笑んでとても印象がいい。ただ、先生はミニスカートをはいていた。しかも膝上3センチは軽くありそうな……。ナターシャ先生は「本職はモデル」かのように、毎朝キメてきた。黒い上下の下着が薄く透けて見える茶色のワンピースを着てきたこともあるし、「エジプトの王女様」ルックスの服を着てきたこともある。8月といえば夏の真っ盛りだから、胸の谷間を強調する服を着てくる。私はこの先生を前にしていると自分の忍耐力が試されているような気がして、実にニガテであった。だからグループの授業では極力目を合わさないでいられる席に着いた。

グループには世界各国から様々な経歴、年齢の人が集まる。私はこのグループの授業というのもまたニガテであった。外国人のロシア語の発音がよくわからないのである。それに慣れるには時間がある。ナターシャ先生は毎日一度は「では皆さん、3人ぐらいのグループで、〇〇のテーマで話しあって結論を出して下さい。あとで発表をしてもらいます」という課題を出した。それは会話のトレーニングとしては当然のことである。けれども西洋人だの、南米人だの、中東人だの初めてみる国の人々を目の前にするとアガってクラクラするし、おまけに発音がなんだか聞き取れない。……。

ナターシャ先生は「ハツラツ」としてテーマを学生たちに与えてはよく会話させるようにした。学生がいくら授業をすっぽかそうが、遅刻しようが、宿題を忘れようが、勉強不足だろうが、授業中少しもイヤな顔をしない……。この先生は発音がよかった。外見がモデルのように美しいだけではなく、話すロシア語もキレイだった。今から思えば、彼女の好きなロシア語の詩を朗読してもらい、それを録音させてもらえばよかったかもしれない。

## イリーナ先生

9月からは個人授業を受けた。グループ授業は、学費は安かったが、「とにかく日本文化のプレゼンテーション」のトレーニングの量を積みたかった自分には物足りなさすぎた。4人の女性の先生に個人で授業を受けることになった(外国人にロシア語を教えるコースには女性の先生しかいない)。

一人目はイリーナ先生。まだ30歳にならない若い先生。

この先生は丸顔で本来は古風な顔のつくりであったが、「あえて現代の若者風で若さを強調する」かのように、右目の眉毛に金色のピアスを二本通していた。寡黙な感じで愛想笑いなど決してしない。……。

授業は一コマ80分である。初めに(私が)自分でレコーダーに吹き込んだ日本文化のテーマの作文を先生に流してもらい、1分以内に口頭通訳するトレーニングを3回ほどやった。それからプレゼンテーションのトレーニングをやった。……。まず、日本文化のどの分野を選ぶか決め、その分野から任意に先生にテーマを選んでもらう。その後2分間、そのテーマのプレゼンをロシア語で私が行う。2分が過ぎると先生に質問をしてもらい、それに答える。さらに文法、発音、ロシア語らしい自然な話し方について間違いがあれば先生に指摘してもらい、また彼女がもっと知りたいことがあれば自由に質問してもらい、その方法をとると80分あっても、実際のところ3つか4つのテーマしか話せなかった。

イリーナ先生は、無表情で事務的に授業を進めているような感じがしたが、実際のところ「何が何でも国家試験に合格したい」という私の気持ちを一番理解してくれていて、実際のテクニックを教えてくれた。口頭作文でうまく全体を訳せないときは、「メモは話を全部書きこもうとしてはいけない。固有名詞、年代、数字を書いて、それをヒントに訳す」とアドバイスしてくれた。

松島のプレゼンをする、質疑応答で彼女は次の様な質問をした。「松島には何十という小島があるそうですが、その島にはホテルがあって宿泊できるのですか?」。松島観光案内所の職員でもあるまいし、そんな質問に自分は答えられない。すると「意表をつく質問されて答えに窮したときはユーモア・冗談で返すものですよ。たとえば、そんな質問には『多分、松島の群島にホテルがあって観光客が押し寄せれば、ここは日本三景と呼ばれるような名所にならなかったでしょうね』という風に。試験官といい、観光客といい、ユーモアで返事をされればそれで納得するものですよ」と教えてくれた。それから答えられない質問にはいかにユーモアのあふ返事をするか考えるようにして、次第にそれができるようになってきた。

また選ばれたテーマを消化できず、しどろもどろにプレゼンすると「まず、基本的な事実を話してください。いつ、どこで、それは何かを。それから枝葉となる情報を話してください。そのテーマの具体像をまずはっきりさせないと、聞き手はイメージしづらいです。」

口答作文対策をしている時に、日本文を2分以内にうまく訳せないことがあった。通訳に窮する私に彼女はこのように指導した。

「ある一定の数のロシア語の文章を覚えなくてははいけませんよ。過去問に出てくるロシア語の作文は全部覚えてくださ

い。私の父はスペイン語の通訳をしています。ある時テレビでベネズエラの大統領とベラルーシの大統領の対談を父が通訳していました。自由自在に通訳するので私は驚いて、父が帰宅すると『どうしてあんなに自由自在に通訳できるのか』と聞きました。父は『それは経験によるんだ。ある程度のスペイン語の文章を暗記しているので会話の言葉をその定型に当てはめて話している。また、ロシア語にない冗談や諺を話されたときでも、自分流に取捨選択、言い換えて話の全体像がわかるようにロシア語にしているよ』と言いました。ですから基本的な文章は必ず覚えてください。」

## ソフィヤ先生

彼女は 50 代半ばの先生だった。経歴多彩で、昔キューバでロシア語を教えていたことや、スペイン語通訳として活躍していたこともあった。日本の俳句が好きで毎晩寝る前に数句ロシア語で読んで寝るという。彼女はあまり威張らないが教養は最も高く、講師の間で尊敬を勝ち得ていた。というのはこのロシア語学科で教材(教科書)を作成する時、最終校閲者は彼女だったのである。教養の高さもさることながら、人徳もあつく、ベラルーシの知識人・ジャーナリスト、他大学の研究者とも親交があって、よくその話が出てきた。日本通のロシア人ジャーナリストが書いた日本文化論「桜の花はいつ咲くか」(\*注)という本を読むように勧めてくださった。

\* 邦題「桜の枝〜ソ連の鏡に映った日本人」(フセヴォロド・オフチニコフ著、サイマル出版)のこたか(編集部)。

最初ソフィヤ先生に授業を受けた時、手加減してゆっくり話をされているように感じた。同じ言葉を 3 回言う癖がある。私が「手加減してゆっくり話さないでください」と頼むと、「いいえ、私は少しもゆっくりと話していませんよ。これが私の普段の話し方です。それに私は厳しい先生として学生からは怖がられていますよ。」と言われた。私は実に意外な感じがした。

私は、口頭作文対策として毎回違うテーマの日本語作文をレコーダーに吹き込み、それを試験方式で通訳した。日本文化についての作文を 300 テーマぐらい書き、その目次を先生に渡し、授業ごとに違うテーマで質問してもらってプレゼン対策をした。この「300 テーマの目次」はオリジナルな方法らしく、ソフィヤ先生は気に入られたようであった。

ソフィヤ先生に教えられたことは人間性の重要さであった。初めてのプレゼンのテーマは着物であった。わたしは事前に作文に書いたことを思い出しながらしどろもどろに、青くなったり赤くなったりしながら話した。先生はにこにこしながら言った。

「あなたの話は情報の断片の継ぎ合わせですね。軍隊で部下が上官に報告しているような感じで機械的な感じがします。もっと魅力的に、おもしろく話してください。日本文化を外国の人が興味を持てるようにもっと明るく、楽しんで話して

ください。人はおもしろく興味深い話を聞いていると些細な文法の間違いは気にならないものです。」

それから私は「いかに完璧に話すか」ではなく「いかにおもしろく話すか、にこにこ微笑んで話すか」に気をつけて話すようになった。

ソフィヤ先生のもっとも魅力的なところは「自分の授業を受けている学生はみんな自分の子どもように感じる、心のあたたかさ」のようであった。

似たようなテーマでプレゼンの練習をしているとしんどくなってくる。……、一ヶ月ほどしてから、以前日本でロシア人留学生と一緒に作成した作文から 3~4 つテーマを選んで書き抜き、ソフィヤ先生に見せるようにした。初めて見せた作文のテーマは明治維新だった。ロシア人の大学院生が直してくれたのであるから間違っているはずがない…のだが、ソフィヤ先生はガラッと人格を変えて言った。「これはロシア語ではありません！」。

奈良公園について 2 人のロシア人留学生に直してもらった作文を見せても、「これはロシア語ではありません。意味がわかりません」と言った。

……。今まで何年もかかって書きロシア人の留学生に直してもらっていた作文を見せるにつれ、先生の機嫌は損なわれてきた。私もガックリすることが多くなった。実は私も大学でロシア人の学生に日本語を教えていたことがある。彼らが書く日本語作文はまず「普通の日本文」として通らない。だがロシア語はさらに難解なのかも知れない。

日本文化についてある一つの事柄を、日本文から辞書を引きながらロシア語に直すとする。それをロシア人に見せると、ほとんど必ず「こんな言い方はしない」と直される。問題はそれからである。直された作文を別のロシア人に見せるとまたもや「こんな言い方はしない」と直される。人に見せるたびにそれが繰り返されるのである。この大学の先生に直してもらった作文を、別の先生に見せると「こんな言い方はしないし、普通のロシア人がどうしてこんな間違いをしたのかわからない」と言われたこともある。ロシア語とはロシア人同士でも解釈が異なる言語なのだろうか。

ただ、ソフィヤ先生はそれを明解に解決されていた。「文章を直したり直されたりすることが、どうしてよくないのです? 原稿に書かれた文章とは共通の素材であって、誰もが校閲する機会を与えられています。もちろんわたしが直した文章も直されるでしょうね……。けれどそうやって表現は育っていくものです」。

言われてみれば「そういうものかな」という気もする。だがお金を払って作文を直してもらい、それをその度に正確に暗記し即戦力として使うつもりでいる自分にはたまったものではない。

後で違う先生に、ソフィヤ先生に添削された作文を見せる

と、まともや直されてしまった。その先生は言った。「まあ、あの先生はどうしてこんな初歩的な文法のミスをしたかしら？」

### アレクサンドラ先生

9 月が過ぎようとする頃、イリーナ先生は二週間の休暇に入ることになった。個人授業はアレクサンドラ先生が引継ぐことになった。「アレクサンドラ先生って、どんな先生なのでしょう？」と聞くと、「心配することはありませんよ。新人の先生の研修を受け持っている先生がアレクサンドラですから」とイリーナ先生は言った。

アレクサンドラ先生は 50 過ぎぐらいのベテランの先生である。髪の毛は真っ黒なのだが、肌は真っ白で青い目をしていた。

個人授業を受け始めて一ヶ月が過ぎようとするころ、私は自分の学習スタイルに“ある種の危険”を感じ始めていた……作文のテーマとプレゼンのテーマが、ワンパターンになってきている。

国家試験の範囲とは「日本文化」である。わかりやすく言うなら、「日本の今朝の新聞に書いてあることすべてを、海外事情と特殊な専門用語を除いて、ロシア語で通訳しプレゼンできるか」ということである。ベラルーシに来るまでに 300 のテーマでノートをつくり、作文を書き暗記してきたが、「口答試験に 2 度落ち、しかも 2 度とも自分の納得のいくような返答ができなかった」という敗北感が、「こんな調子ではまた落ちるぞ」と私にささやき始めた。方法は一つしかない。プレゼンのテーマを増やしてできるだけ多くの作文を書き、作文、単語とともに暗記し、話すことである。インターネットで検索して国家試験の過去問題を調べあげた。口頭作文はこの 3 年間で 50 ぐらいあった(なぜこれほど多いかと言うと、問題は年度だけでなく 1 時間ごとに異なるからである)。私はそれらすべてを日に 4~5 問ずつロシア語に翻訳して先生に見せて直してもらい、その日のうちに暗記して、翌日の授業で暗誦した(先生は驚いた)。

新しいプレゼンのテーマも過去問を参考に「一日に最低 4 つ」とノルマを決めて書き始めた。

アレクサンドラ先生に見てもらった作文は……日本人の苗字、一汁三菜、姫路城、六文銭、長崎市、伊勢志摩、地球温暖化、鶴飼い、東京スカイツリー、ハロウィン、バレンタインデー、血液型、朝市、黒船、金沢、仙台、出雲大社、松江、白川郷と五箇山、高山、沖縄、野口英世、伊藤博文、夏目漱石、福沢諭吉、新渡戸稲造、樋口一葉、源氏物語、築地市場、小笠原諸島、棚田、JAPAN RAIL PASS、北海道新幹線、東海道五十三次、金閣寺、北山文化、古事記、日本遺産、伊達政宗、お水取り、千利休、日本料理、五重塔、卑弥呼、小京都、足利義満、白神山地、八幡製鉄所、寝殿造り、東山文化、銀閣寺、書院造、伊勢神宮、奈良公

園、春日大社、東大寺、江戸時代、法隆寺、有馬温泉、聖徳太子、浅草、屋久島、日本人の習慣、温泉、日本の気候、明治維新、地方自治体、遍路、……。

11 月の最後の授業の日、アレクサンドラ先生は言った。

「今までいろんな学生を指導してきましたが、あなたほど多岐にわたるテーマについてロシア語で話をし、作文を書いた人はいませんでした。あなたの好奇心と知識の量には、お世辞でなく脱帽です。拍手喝采に値します。わたしは日本をよく知りませんでしたが、あなたの話を聞いて興味が湧いてきました。これから折をみて日本についての本を読んで、あなたの国のことをもっと知りたいと思っていますよ。」

### 再びナターシャ先生

10 月半ばから 11 月初旬にかけて、私はナターシャ先生から個人授業を受けることになった。

午前中にアレクサンドラ先生からひとコマの授業を受けて、午後からナターシャ先生からひとコマ授業を受けた。アレクサンドラ先生には、寮で書いた作文を見せて書き直し、時間があればプレゼンの訓練をした。ナターシャ先生とはもっぱらプレゼンの訓練をした。どうしてか…? いつも“にこにこ”しているこの先生と「日本語とロシア語の表現の仕方の違い」でケンカしなくなかったからである。また、8 月に彼女に直してもらった作文を他の先生に見せたところ「こんな言い方はしない」とすぐ直されてしまい、困惑していたからでもある。今から思えばそんな「授業の受け方」を逆にして、この先生のもっと違う一面を見て、切り口の異なるロシア語を学んだ方がよかったかも知れない。

……。しかし、私の選択はある意味賢明なものであった。もう 2 度も落ちた口答試験で、ただでさえ緊張してアガっている状態で、「いかにも外人」という試験官がペラペラとロシア語で質問するのを「どう沈着冷静に切り返して答えるか」というトレーニングをするにおいて、ナターシャ先生ぐらい適した人物はいなかったであろう。なぜか? 彼女は映画女優のように美しかった。有名人ならオードリー・ヘプバーンに感じが似ていた。日本女優なら若い頃の吉永小百合、現代なら広瀬すず。試験官にオードリーや吉永小百合みたいな美人が出てきて、彼女たちと視線をピッタリ合わせて冷静に質問に答えられるようになれば、多分本当の実力と思う。

ナターシャ先生は、日本についてステレオタイプな知識しかなかったのも、自分にとって「外国人にわかりやすく日本を紹介する」にはいい勉強になった。この先生には、「魅力的な人物が共通して持つある才能」があった。それは「人生や生活を大いに心から楽しむ」というそれである。そういう才能を持っている人は、精神が生き生きとしていて活力があるから、自然と周囲にいる人も元気が出てくる。ナターシャ先生の授業を受けているとクヨクヨしているのがバカらしくなってきた。気持ちがグンと上向きになるのを感じた。(つづく)